

島田正治

長女のはるひは、永年勤めた東京都の公立中学校の国語の教員をやめてしまった。この四月からである。年は四十三歳である。佐藤一典氏と結婚、一男を得る。佐藤氏は産経新聞東京本社の報道写真部勤務。

そのはるひが、つい先日、このメキシコまで電話してきて「文章書きはじめたから、お父さん読んでくれる。」「ではFAX送るから」と言って電話を切った。何分もしないうちに何ページかのFAXがとどいた。

題して「うちのお父さん」で ”私の父はちょっと風変りな男性です” から始まる。わたしはまずタイトル、この題が気に入った。題として固苦しくない。現代的でもある。くだけている。そういえば、まだ娘たちが幼い小学校か中学生ころ、よく電話などで友達に ”うちのお父さんたら” とその口端に登場していたのを記憶する。何かと話題になっていたのかも知れない。

一回が原稿用紙四枚ていど、字数にして千六百字、ほどよい読みものになっている。その一回ごとに短いタイトルを付した。わたしが娘の文をつぶさに読んで、本心から涙した。落語の中の「子ホメ」ではない。真にいいと感じたので、今、ここに書かせてもらっている。

どこで、どう、いつ勉強したのかわからない。文章修業というのは、そのほうの専門の学校へ行ったからできるものでなく、やはり、本人がその気になったときから出発すると思う。入口である。絵の勉強、修業と全く同じことなのである。娘はまさにその入口に立った。

今回、忙しかった勤めをやめたことで一気に解放され、時間も自由になった。余裕もできた。書きたい想いが湧出したという。

娘、父を語るは世によくある。詩人の萩原朔太郎のことを書いた朔太郎の娘、葉子の「いらくさの家」は有名である。幸田露伴の娘の幸田文、森鷗外の小堀杏奴、瀧井孝作の娘、小町谷新子さん、「手書き通信」を二十年つづける石森延男の娘、尾見七重さんも挙げられる。

親と子はほぼ三十年、つまり一世代のちがいがあがる。また父と子は血縁関係で結ばれている。書こうと思えばきっと何かある。目には見えない糸でつながっていることになる。永遠のテーマであり、また尽きることはないだろう。

日本の文芸雑誌「文藝春秋」なども、おやじ、おふくろを毎号、二ページにわたって、それぞれの各界の知名人が語る欄がある。もう何十年もつづいているのではないかと思われる。

まあ、そんなことで、長女の書きはじめた「うちのお父さん」が、またどこかでお目にかかるやしれず、なんか娘の文章読んで、その書くことのコツを掴んだような気がするし、また内容的にもまだまだおもしろくなるのでは、と大いに期待もするわけである。（つづく）

ご意見・ご感想はアルテ・シマダまでお送りください。